

〈特別寄稿〉

## 銀雀山漢墓竹簡の発見と活用

郭 映 雪

### 序 論

竹簡は、戦国時代から魏晋時代にかけて主に使用された書写材料であり、細長い竹片（木片）で作られている（図1）。紙が普及する前、古代人は当初、文字を甲骨や青銅器に記していたが、書写材料に制約があり、文化や思想を広く伝えることが難しかった。殷（商）時代までは、文字を使用できたのは社会の上層部のみであった。筆で字を竹や木片の上に書き、それを編んでまとめて使用したが、簡単に作成が可能で、持ち歩きや保存にも便利であった。竹簡によって文明はいつそう多彩になった。

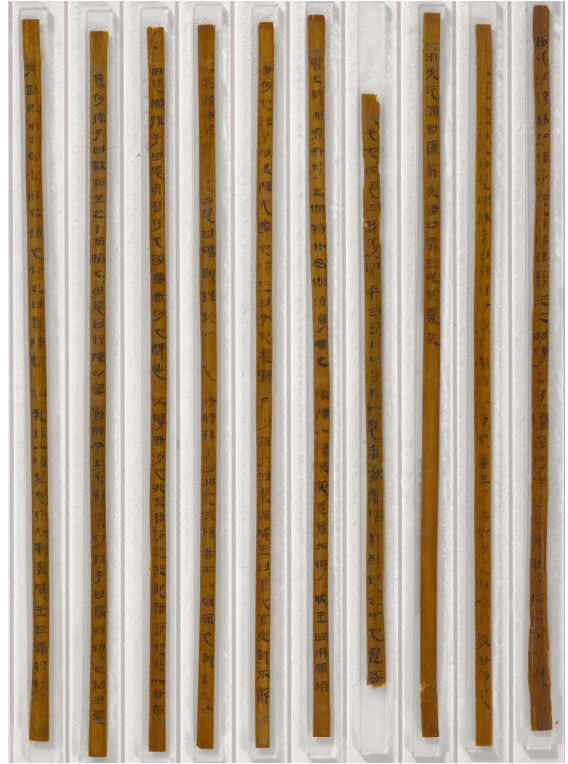
また竹簡は、古代文明を解き明かすための貴重な資料を提供した。一九七〇年代、中国の考古学において極めて重要な発見が続き、国内に止まらず、海外にもその影響が及んだ。その一つが山東省臨沂市銀雀山の第一、第二号西漢墓の発掘である（注1）。銀雀山漢墓が発掘されてから五〇年の間、山東博物館は竹簡の保護・研究と伝承に力を注いできた。本稿では、主に「千年宝物 人間再現」「兵学聖典 世界驚嘆」「画像採集 伝承研究」「教

育普及 文物活用」という観点から、改めて銀雀山漢簡の発見とその活用について述べたい。

#### 一、千年宝物 人間再現（貴重な文物が再び世に表れる）

一九七二年四月十日、山東省臨沂市南部の銀雀山の工事現場で、地元の人々が古墓を発見した。その後、山東省博物館（二〇一一年に山東博物館へと名称変更）と臨沂文物組はこの墓と隣接する別の墓に対して発掘調査を行った。

二つの墓は、石室に収められており、墓穴は直接石を掘って形成されている。墓道は存在せず、墓は長方形の竪穴木棺墓である。二つの墓は〇、五メートル離れて安置されており、墓室の構造は基本的に同じである。棺の外側には黒の漆が、内側には朱の漆がそれぞれ塗られており、木の材質は硬い。以上の墓の特徴や、出土した副葬品の形制から鑑みると、二つの墓の時代はいずれも前漢初期のものだと推測される。



(図1) 孫子兵法竹簡

## 二、兵学聖典 世界驚嘆（兵学の経典が発見され、世界を驚かす）

整理後、銀雀山漢墓からは竹簡七六二三枚、木牘五点の計七六二八点が出土したことが判明した。一号墓出土の竹簡が大部分を占め、長簡の長さが二十七・六センチ、幅〇・五〇・九センチ、厚さ〇・一〇・二センチで、短簡の長さが約十八センチ、幅〇・五センチである。また少量の木牘が見つかり、長さ約二十三センチ、漢の一尺に相当するいわゆる「尺牘」が見つかった。二号墓から見つかった竹簡三十二枚は、長さ六十九センチ、幅一センチ、厚さ〇・二センチである。

銀雀山漢墓の簡牘は、いずれも前漢前期の書写で、紀元前一四〇年ないし前一一八年（前漢の文景期から武帝初期）に書かれ、比較的古い写本である。内容から、「兵書」「論政論兵の書」「陰陽数術方技の書」「その他の古書」の四種類に分けられる。一方、現在まで伝わっているかどうかという点で、二つに分けることもできる。一つは、名前のみ伝わる文献や名前すら伝わっていない新出の文献であり、もう一つは現在まで伝わっている文献である。

墓の中には、漆の木器・銅鏡・陶器・銭貨など、多くの副葬品が確認できたが、最も重要な文物は大量の竹簡である。墓に水がたまっており、竹簡は長い間、泥の中に浸かった状態であった。従って、竹簡を結ぶ紐は朽ちて無くなり、発見時にはすでに散乱していた。また、一部は墓中の泥がこびりついており、ひどく傷み、専門的な洗浄と保護が急務であった。そこで山東省は、国家文物局に援助を求め、竹簡はすぐ北京に運ばれた。国家文物局は山東省博物館と全国の専門家と学者を呼び、竹簡に対して全面的な保護・整理・研究を展開した（注2）。一九七四年六月、周恩来首相は自ら指示を出し、整理された竹簡を山東省に移送し、山東省博物館へ所蔵・保管を指示した。

前者は、『孫臏兵法』（『斉孫子』）十六篇・『孫子兵法』（『呉孫子』）佚篇五篇・漢武帝『元光元年歴譜』・『地典』・唐勒宋論人材賦・『守法』『守令』等十三篇・論政論兵類の書五〇篇・陰陽・時令・占候の書十二篇・相狗・作醬法などの雑書が挙げられる。これらの文献は伝世文献の内容を裏付け、補完する点で重要な意義を持つ。たとえば漢武帝の『元光元年歴譜』は、中国において今まで発見されたものの中で、最も古く保存状態の良い曆書で、古代曆の研究において貴重であり、『資治通鑑目録』などの文献典籍の誤りを訂正することができる。

後者は、『孫子兵法』十篇、『尉繚子』五篇、『六韜』十四篇、『晏子』十

六篇などが挙げられる。当時の学界では、これらの文献をより後世の成立だと見なす動きもあった。しかし、銀雀山漢簡にこれらの文献が含まれていたことにより、成立の古さが明らかとなった。後者の文献は、文献の校訂・源流と沿革の考察に有用である。

銀雀山漢簡に含まれる文献は、兵書が最も多く、これまでの出土文献の中では最も豊富である。特に最も世間に注目された『孫子兵法』と二千年以上失われていた『孫臏兵法』は同じ墓から出土し、千年繰り広げられていた孫子とその書に関する論争を終結させた。

『孫臏兵法』は魏晉時代に失われ、隋代以降の図書目録には見られないため、宋代以降の学界では、孫子と孫臏の関係について議論が続いている。主な説は以下の通りである。

- ・『史記』の記述を支持し、孫子・孫臏はそれぞれ違う人物で、各々の兵法が伝わってきたという説。
- ・『孫子兵法』の著者は孫臏で、孫子と孫臏は同一人物であるという説。
- ・孫子・孫臏は別々に存在していて、既存の『孫子兵法』の著者が孫臏であるという説。

銀雀山漢墓の竹簡が出土するまで、学者たちはそれぞれの主張を唱え、論争が続いていた。そして『孫子兵法』『孫臏兵法』が同墓より出土すること、孫子と孫臏が実は二人で、それぞれ兵書が伝わっていたことが実証された。

『孫子兵法』は春秋末の斉人である孫武の作で、中国で最も影響力のある兵書であり、「兵学の聖典」と称えられている。『孫臏兵法』の著者は孫臏本人とその弟子であり、孫臏は孫武の子孫で、孫武より百年ほど後の人

物である。

銀雀山漢墓の発掘は、非常に重要視され、七〇年代に「新中国50年影響最大の考古発現」の一つに選ばれ、九〇年代には「新中国影響最大の考古発現」に選ばれた。さらに二十一世紀の初めに、「中国20世紀100項考古発現」の一つと評価された。銀雀山漢簡は中国の歴史・哲学・曆法・文字・簡冊制度・古籍校勘・書道芸術など、多方面の研究において貴重な資料であると言いうことができる。

### 三、画像採集 伝承研究（竹簡の整理作業・研究）

一九七四年六月、周恩来首相は、銀雀山漢簡の移送用の列車を用意させた。銀雀山漢簡は北京から山東に運搬され、山東省博物館に收藏された（注3）。これを機に、銀雀山漢簡と山東博物館との縁がはじまった。これらの貴重な遺産を丁重に保護し、次世代に伝えることは、山東博物館が果たすべき責任と義務である。

二〇一五年、山東博物館は国家文物局が呼びかけた「第一次可移動文物普查」に応じ、中華文物遺產研究院・荊州文物保護中心・清華大学出土文献研究与保護中心などと共に「銀雀山漢簡保護、整理与研究」というプロジェクトを進めた。この事業は、国家文物局に承認され、さらに「二〇一一年協同創新平台」という重点事業にも採択された。プロジェクトの項目は、「一、銀雀山漢簡の保管・保護及びデータ採取」「二、銀雀山漢簡の整理と研究」「三、文物の継続的利用について」に分けられる（注4）。

二〇一五年七月から九月までの約二カ月の間、一の事業が順調に完了した。全ての竹簡に対して再び殺菌処理を行い、一部の試験管・ゴム栓などの器具を新調し、長期間の保護にも耐えられるような処理を施した。同時

に、竹簡の赤外線画像の採取と表裏のカラー写真を順調に撮影し、それぞれの精密な画像データを入手し、後の整理・研究のための基礎を築いた。

銀雀山漢墓から出土した約七千点の竹簡は、貴重な出土文献として、伝世文献とは比較できない程の真实性を持ち、重要な研究価値がある。竹簡が出土した後、国は専門家を呼び研究を始めた。当初は、羅福頤・顧鉄符・呉九龍などの専門家が、釈文・模写の作成などの整理・編集作業を進めた。さらに一九七四年、北京大学をはじめとする八機関の専門家で構成された十九人の整理チームが発足した。

研究チームの作業が進み、その成果が報告されると、中国内外の学界は大変驚き注目した。しかし、当時の撮影技術には限界があり、写真はモノクロで、一部の文字は不明瞭であり、釈読できない部分が存在していた。また、モノクロ写真だと、竹簡の朱色での表記・背面の劃痕・反印文字は確認できないので、新たに赤外線写真とカラー写真の採取が必要となった。

現在、原整理チームの研究成果をもとに、新しい整理と研究プロジェクトを着実に進めている。参加者は、清華大学・復旦大学・吉林大学・山东大学・済南大学・中華書店や、中国文化遺産研究院・故宮博物院・山東博物館といった機関に所属する専門家である。また、研究の質を高めるため、李学勤・裘錫圭・李均明氏に学術顧問という形で参加してもらっている。

新しい研究成果である『銀雀山漢墓竹簡集成』は、新たに撮影した赤外線スキャン図版・カラー表裏面及び部分拡大図版を追加し、一部の釈文には注釈を増補している。合わせて十集に分かれており、各分集の内容及び分担者は次の通りである。

第壹集『孫子兵法』、楊小亮

第貳集『孫臏兵法』、張海波

第參集『尉繚子』、賈連翔

第肆集『守法守令等十三篇』、鄭子良・宋華強

第伍集『六韜』、楊青・劉釗

第陸集『論政論兵』(上・下)、楊安

第柒集『晏子』、駢宇騫・王輝

第捌集『陰陽時令占候』(上・下)、衛松濤・王輝

第玖集『唐勒』『七年視日』木牘等、馬楠・張海波

第拾集『散簡』(上・中・下)、張海波(注5)

現時点で、第壹集から第參集までは既に出版され、銀雀山漢墓竹簡研究の基礎を一層固める重要な資料となっている。

#### 四、教育普及 文物活用(竹簡の教育普及と文物の活用)

二〇一一年、専門家の選定と観客の投票を経て、銀雀山漢簡は「山東博物館十大鎮館之宝」に選ばれた。山東博物館は、銀雀山漢簡を収蔵する機関として「博物館に収蔵された文物、広大な大地に並べられた遺産、古い典籍に書かれた文字を生かす」という方針を徹底し、竹簡による教育の普及を重視しており、その成果は着実にあがっている。

例えば、二〇一六年には簡帛の歴史文献的価値と芸術的価値を高めるべく、「書於竹帛—中国簡帛文化展—」を開催し、近年の中国簡帛文献の整理と簡帛文化研究の成果について展示した。二〇一九年には中央テレビ(CCTV)と提携し、『孫子兵法』『孫臏兵法』の竹簡を中央テレビの番組「国家宝藏」で紹介した。番組は盛況に終わり、視聴者の銀雀山漢簡への興味と見学したいという意欲を大いに刺激した。

また、青少年教育プログラム「書写竹簡」を立ち上げ、子供に竹簡を編んでもらい、竹簡を書く過程で歴史知識を学ぶ場を提供している(図2)。さらに、二〇一九年には「書写竹簡」体験プログラムを海外でも開催した(図3)。具体的には、山東省及び中国を代表して日本・韓国で開催された文化・観光のプロモーション活動に参加し、外国の人々に竹簡を知ってもらい、中国文化の魅力を体験する機会を提供した。

山東博物館の展示室では、展示ケースの中に陳列されている銀雀山漢簡を見ることが出来る。竹簡は、劣化を防ぐためのガラス管の中に丁寧に保存され、また柔らかい光に照らされ、表面の文字が鮮明に見えている。その様子は、あたかも我々に何千年前の物語を訴えかけているようである。



(図2) 青少年教育プログラム  
「書写竹簡」



(図3) 「書写竹簡」体験プログラム  
(二〇一九年・大阪)

注

- (1) 山東省博物館・臨沂文物組「山東臨沂西漢墓發現《孫子兵法》和《孫臏兵法》等竹簡的簡報」《文物》一九七四年第二期、一九七四年
- (2) 李慧芹「遺落在竹片上兩千年的墨痕落在竹片上——銀雀山漢墓竹簡——」《中國博物館》二〇一〇年
- (3) 胡新民「周恩來與文物考古工作」《黨史博采 上》二〇一八年第八期、二〇一八年
- (4) 楊青「守護國寶、傳承文明——揭秘銀雀山《孫子兵法》《孫臏兵法》漢簡——」《春秋》二〇一九年第一期六十三頁、二〇一九年

(5) 山東博物館・中国文化遺產研究院編、賈連翔整理『銀雀山漢墓竹簡集成 參』(文物出版社、二〇二二年)

郭映雪(かく・えいせつ)

一九八四年生まれ。中国済南・山東博物館文博副研究館員。専門は博物館学(文物鑑賞、教育普及と展覧会海外交流)。主編訳に『郷愁―日本近代浮世絵名品―』(北京聯合出版公司、二〇一七年)、主要論文に「博物館視角下的日本海外教育旅行研究」(『山東博物館輯刊』、二〇二〇年)、「四千年前地球文明最精緻之制作―卵殻黒陶高柄杯―」(『春秋』二〇二二年第四期、二〇二一年七月)など。